

「人権教育研究指定校事業」事業実施報告書

研究指定校名：鳥取市立賀露小学校

1. 学校の概要

学校名	鳥取市立賀露小学校
学級数	15学級（うち特別支援学級：3学級）
児童生徒数	全児童数：329人（平成30年2月1日現在）
URL	http://www.torikyo.ed.jp/karo-e/

2. 調査研究のテーマ

(1) 調査研究のテーマ

「つながり合い 高め合う 賀露健児の育成」
～ユニバーサルデザインの授業づくりを核として～

(2) 調査研究のテーマを設定した背景

鳥取市北部に位置し、鳥取港を有する賀露地区・千代水地区の一部からなる本校は、児童数329名15学級の中規模校である。地域では、自治会・地区公民館を中心に伝統行事が大切に受け継がれており、児童の地域行事への参加の機会も多い。さらに、地域や公民館・自治会等の学校教育への期待も高く、協力的な地域である。一方、児童の約20%が要保護・準要保護家庭であり、また、大型ショッピングセンターを中心としたショッピングモールの進出や新興住宅地の造成・広がりなど、児童を取り巻く環境は刻々と変容しつつある。

本校では、これまで「生き生きとした賀露健児の育成」を教育目標とし、確かな学年・学級経営を基盤に生き生きとした学校生活の中で、将来の夢を育み、夢や現在の目標に向かって着実に努力する児童の育成をめざしてきた。しかし、児童の実態として、ルールがなかなか守れない子が多い、しっかりとしたあいさつのできる子が少ないといった「規範意識の低さ」や自分のよさをみつけられないといった「自尊感情の低さ」、自分の気持ちをきちんと相手に伝えることができず、トラブルになってしまうというような「コミュニケーション力の低さ」等の課題が見てとれ、これらは児童アンケートや保護者アンケートの結果からも裏づけられている。また同時に、不登校や問題行動等も多く発生し、落ち着いて授業に集中することが困難な状況もあり、その対応としての生徒指導が大きな課題となってきた。

そのような実態の中で、これまでともすると教師主導の生徒指導が多くなりがちであったが、平成28年度は、早稲田大学の田中博史氏が提唱する「学級力向上プロジェクト」の取組を導入し、児童自身が自らの課題を見つけ、自分たちで解決策を考え、行動していく取組を進めてきた。その結果「アンケートの自己点検によって課題意識が向上した」、「レーダーチャートによる可視化をすることで、自分たちの課題がとらえやすくなった」、「取組を継続したことで、学級集団の変化を確認できた」等の手ごたえを感じる事ができた。一方、「『はい』と返事をし、最後まではっきりと発言している」等の学習規律の定着や「授業にすすんで取り組んでいる」等の学習意欲の向上には、まだまだ結びついていなかった。そればかりか、中には、「教科書を開こうとしない」、「ノートをとろうとしない」等、まったく授業に向かおうとする意欲のもてていない児童もおり、そうした児童は、授業の

中で「わかった、できた」という達成感や楽しさを味わうこともできず、そうしたストレスが、友達とのトラブルや問題行動につながっているのではないかと考えられた。そして、その原因の一つとして、「学級力向上プロジェクト」の取組を授業改善・学力向上に結び付ける道筋（方法論）を明確にできていないため、ともすると各学級での授業実践において、それぞれの教師の力量によってばらつきが生じてしまうというようなことがあげられるのではないだろうか。さらには、学級集団・学習集団づくりの取組が委員会活動や代表委員会等の児童会活動の活性化にまではつながっておらず、学校全体としての「自治力」の育成の取組としてはまだまだ不十分だと言わざるを得ない状態であった。

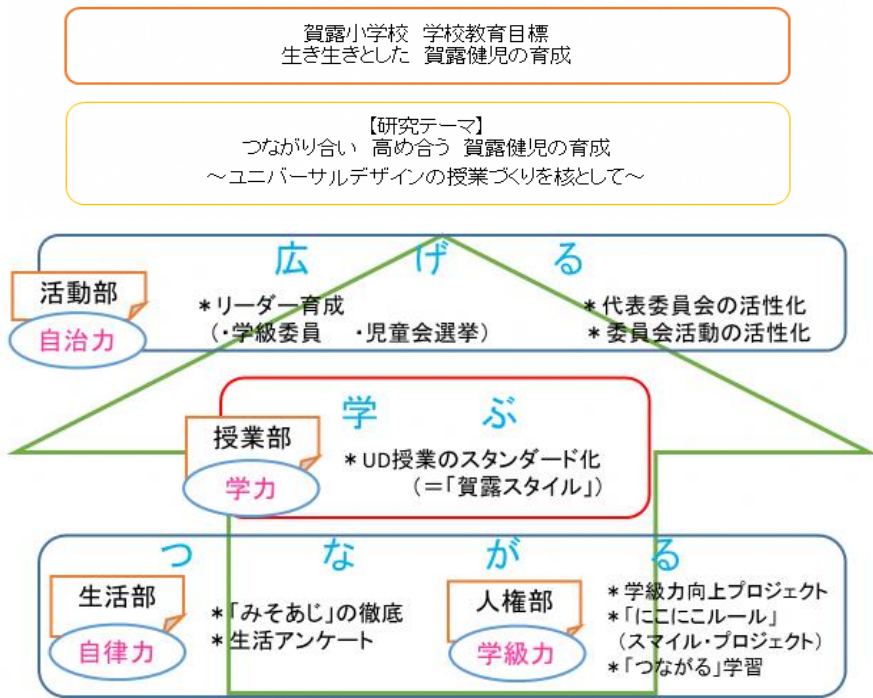
そこで、平成29年度は、ユニバーサルデザインの授業づくりを核として、以下のような取組を進めてきた。

まず、「つながる」取組としては、規範意識の向上、基本的な生活習慣の定着をめざした中学校区での共通した取組である「みそあじ」の徹底、いじめをはじめとした生活の問題を振り返る生活アンケートの実施、鳥取市「スマイル・プロジェクト」とリンクした「にこにこルール」の設定、学級集団づくりをめざした「学級力向上プロジェクト」の実施、いじめの問題を中心とした「つながる」学習の充実等の取組を進める中で、「自律力」「学級力」を育てたいと考えた。

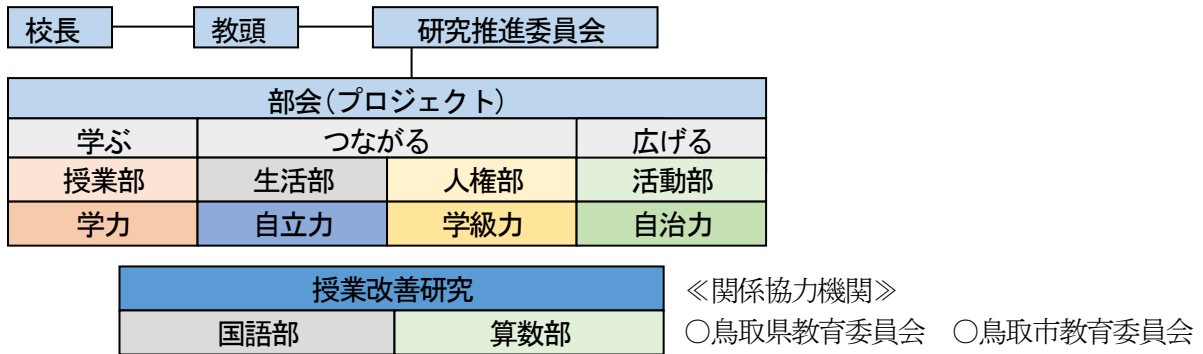
次に「学ぶ」取組としては、国語科、算数科を重点教科としながらユニバーサルデザインの授業づくりの研究を進め、「賀露スタイル」としてスタンダード化し、どの教室でも「わかる・できる」喜びを味わえ、全員参加の授業が展開される中で確かな「学力」を育てるよう取り組んだ。

そして、「広げる」取組としては、学級会活動や児童会活動の活性化と共にリーダーの育成を図り、委員会活動や代表委員会等を中心に、重点項目を決めて取り組むなどしながら、「つながる」取組を支援・発展させる形で、学級や学校全体の「自治力」を育てる実践を行ってきた。

これらの取組・実践を通して、本研究テーマ「つながり合い 高め合う 賀露健児の育成」に迫ることができるものと考えた。



3. 調査研究の推進体制



4. 調査研究の内容等

(1) 調査研究の内容・実施日程

① 「つながる」取組（「自律力」「学級力」の育成）

- 中学校区での共通した取組である「みそあじ（身だしなみ・掃除・挨拶・時間を守る）」の徹底を図るための「児童発」の取組となる仕組みづくりに取り組んだ。
- 友達同士のいじめなどに気づくために、友達関係を振り返る「なかよしアンケート」を実施した。
- 「学級力向上プロジェクト」を通して、自分の学級を評価する活動を取り入れ、メタ認知力、自己コントロール力を育成するよう実践した。
- 鳥取市「スマイル・プロジェクト」とリンクした「スマイル集会」の開催、「にこにこルール」の設定を通し、学級の間関係づくりを促すよう取り組んだ。
- いじめの問題を中心としながら、ゲストティーチャーや地域ボランティアなど様々な人との出会いや体験活動を通して学ぶ「つながる」学習のカリキュラムマネジメントを工夫した。

② 「学ぶ」取組（「学力」の育成）

- 国語科、算数科を重点教科としてユニバーサルデザインの授業づくりを研究し、実践した。
- 教室環境、板書の形式、学習規律など全校で統一できるところを統一し、全職員が共通理解して同じように指導できる環境を整えた。
- 「わかる・できる」喜びを味わえる全員参加の授業のスタンダード化（「賀露スタイル」）をめざした授業研究会（全体研究会6回、部会別研究会6回）を実施した。
- 他校の校内研究会や、日本授業UD学会の全国大会に参加して、先進的な理論や実践を学び、研修を重ねた。

③ 「広げる」取組（「自治力」の育成）

- 児童会活動の活性化をめざしてリーダー育成を図るため、児童会長、執行部、学級リーダーを設定した新たな仕組みを作った。
- 委員会活動や代表委員会での児童自らの重点項目の設定等、「つながる」活動を支援・発展させる児童活動を工夫し、児童発の取組として「チャレンジランキング集会」などを開催した。

時期	内容	備考
4月10日	○第1回研究推進委員会	10人
4月11日	○第1回校内研修会（研究全体方針・授業のUD化）	全教職員
4月19日	○プロジェクト部会検討会	各部会
4月27日	○第1回人権教育推進事業連絡協議会	研究主任参加
5月2日	○第2回校内研修会（年間研究計画・授業のUD化）	全教職員
6月	*第1回Q-U調査実施	
6月7日	*かろっこアンケート実施	
6月21日	○第1回全体授業研究会（国語：3年1組） ○第2回全体授業研究会（国語：おひさま学級 生活単元：ひまわり学級 算数：あおぞら学級）	全教職員 全教職

6月26日	○第3回全体授業研究会（算数：5年1組） 【指導助言・講義】 明星大学発達支援センター研究員 京極澄子先生 鳥取県教育委員会人権教育課 西垣卓宏指導主事	全教職員 県教委・市教委 他校 7人
7月	*なかよしアンケート実施	
7月19日	○4プロジェクト部会検討会（夏休みまでの反省）	各部会
7月27日	○第2回研究推進委員会（賀露スタイル）	10名
8月2日	○第3回校内研修会（ペア学習について研修）	全教職員
9月16・17日	○日本授業UD学会研究大会（筑波大学附属小学校）	2人参加
9月25日	○修立小学校校内研究会	4人参加
9月26日	○第4回全体授業研究会（国語：6年2組） 全学級授業公開（京極先生に見ていただいた） 【指導助言・講義】 明星大学発達支援センター研究員 京極澄子先生 鳥取県教育委員会人権教育課 山本裕児指導主事	全教職員 県教委・市教委 他校 1人
10月	*なかよしアンケート実施	
10月4日	○第1回部会別研究授業（国語：2年2組）	国語部
10月20日	○第2回部会別研究授業（国語：5年2組）	国語部
10月23日	○第4回校内研修会（全国学テ結果検討・ 全国UD学会研究大会研修報告）	全教職員
10月24日	○第3回部会別研究授業（国語：4年1組）	国語部
11月8日	○第5回全体授業研究会（算数：3年2組）	全教職員
11月	*かろっこアンケート実施	
11月27日	○第4回部会別研究授業（算数：2年1組）	算数部
11月28日	○第5回部会別研究授業（算数：6年1組） ○修立小学校校内研究会 ○津ノ井小学校校内研究会	算数部 1人参加 2人参加
11月29日	○第6回全体授業研究会（算数：1年2組）	全教職員
12月	*第2回Q-U調査実施	
12月4日	○第6回部会別研究授業（国語：1年1組）	国語部
12月6日	○湖東中学校区（KMG）教育研究会開催 鳥取県教育委員会人権教育課 西垣卓宏指導主事	中学校区97人 市教委
12月20日	○第3回研究推進委員会 成果とまとめ	10人
1月	○研究事業報告の作成・印刷	
2月13日	○第2回人権教育推進事業連絡協議会 ○研究成果の配布 ○全体研究会 次年度へ向けて	研究主任参加 成果刊行100冊 配布先：鳥取市内 小中学校

（2）調査研究の成果と課題

<成果>

① 「つながる」取組（「自律力」「学級力」の育成）

○児童の交友関係を知る手掛かりとして「なかよしアンケート」や「Q-U調査」を実施し、その結果からわかる留意点、問題点を教員間で共有することを通して、細やかに児童を観察し、支援することができた。

○基本的な生活習慣の中で、「朝のあいさつ」「廊下の右側歩行」



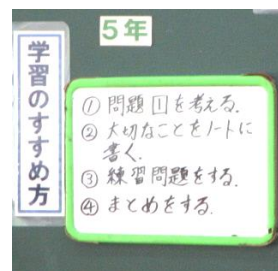
あいさつ運動の取組

「名札の着用」など、具体的なポイントを全職員と児童会執行部、委員会で集中的に呼びかけ、守ることが当たり前であるという規範意識を高めることができた。これらの基本的行動様式が定着することで、安全・安心で落ち着いた学校生活をおくる素地が築かれてきた。

② 「学ぶ」取組（「学力」の育成）

○授業を、参加・理解・習得・活用の4つの階層で捉え、まず全員が参加できる体制を整えるため、授業ルールの特明確化、刺激量の調整、場と時間の構造化に取り組んだ。

(例) 時間の構造化・・・本時の学習の進め方を児童にわかるように揭示し、学習の見通しを持てるようにした。



学習の進め方を明示する

○授業のUD化の3つの視点【焦点化】【視覚化】【共有化】の観点から、教室経営、学習目標の設定、授業の構造、児童の学習活動などを再構築し、学ぶ児童の側から考えた授業に向けて全校一致して取り組むことができた。

【焦点化】

・指導者側の学習のねらいと児童が主体的に学習するためのめあてを明確化し、特にめあての設定を児童が強く興味を持ち、考えたいくなるような提示の仕方になるように工夫した。

(例) 「太一は、一本釣り漁師なのか? もぐり漁師なのか?」(6年国語「海のいのち」)

「ミスターXにどうやって重さを伝えたらよいだろう?」(3年算数「重さ」)

・めあての設定や、学習活動に「しかけ」を取り入れ、児童が意欲を持続させて学習に取り組めるよう工夫した。

(例) 挿絵の順序を入れ替えて提示し、正しく並べ替える過程で話の筋を捉える。

故意に、文章の重要な語句を隠したり、間違えたりして、大事な部分に着目させる。

・授業の展開の中盤に、めあての課題を解決する山場を設定して集中力の持続を図り、本時の学習の達成感を味わわせるように意識した。



挿絵の順序を入れ替えて提示する

【視覚化】

・本時のめあて④、まとめ⑤、ふりかえり⑥のマークの提示を全学級で統一し、ノート整理にも活用させた。

・実物提示装置、タブレット端末、大型テレビなど視聴覚機器を積極的に活用し、理解を視覚的に助けた。

【共有化】

・ペア、グループ学習を日常的に授業の中に取り入れ、友達のをもとに自分の考えを広げられるような共有場面を増やした。ホワイトボードを使って説明しやすくする

・ミニホワイトボードや実物提示装置を使うなどして、自分の考えを友達に伝えやすくし、考えを共有する活動を増やした。



○授業の振り返りの3つの視点を示し、全校統一して黒板に提示できるようにし、継続的に取り組めるようにした。

振り返りの視点 ・わかったこと、できるようになったこと

・友達から学んだこと、いっしょだからできたこと

・もっと学びたいこと、知りたいこと、わからなかったこと

○授業のUD化について全職員が研修を深め、共通の認識のもと実践に取り入れた結果、授業に向かうことが困難な児童や、意欲や自信を持つことができない児童の学習への意識が高くなってきた。

年に2回の「かるっこアンケート」(学校生活自己評価)の結果より昨年度11月と今年度11月の比較「学校はすきですか」 肯定的回答の増加(28年度) 84%⇒(29年度) 88%

「学級にいるのはたのしいですか」	肯定的回答の増加	88%⇒93%
「国語の勉強が好きですか」	否定的回答の減少	28%⇒22%
「算数の勉強が好きですか」	否定的回答の減少	24%⇒15%
「授業、勉強はわかりますか」	否定的回答の減少	11%⇒7%

これらの結果から、少数ではあるが学校や学習への満足感を高めることができ、学習への苦手意識や抵抗感を低くする方向へ向かっていると考えることができる。



京極先生の講義を聴き、理論を学ぶ

○全校でひとつになって授業のUD化に取り組むことで、教師の工夫次第で子どもたちが興味を示し、意欲をもって取り組む授業に変えることができるという教員の意識改革につながってきた。実践の成果を実感することができ、教員自身も意欲的に研究に取り組むことができた。

③「広げる」取組（「自治力」の育成）

- 全校児童による選挙で選出した児童会長を中心とした児童会組織を再編する過程において、児童会や委員会活動が自分たちのための活動であるとより深く意識できるようになり、全校児童を含めた自発的・自治的な活動につながった。
- 「児童発」のアイデアによる自治的な取組の中で、生活の中のルールや目標について、自分たちの課題であり、自分たち自身でチェックし、改善に向けて活動しようという高学年児童の動きを、低・中学年児童も見学することができている。
- 全学級を巻き込んだ「チャレンジランキング集会」など、全校児童で計画・準備して楽しめる活動を実施できたことで、自治を実際に体験することができ、高学年児童の大きな自信につながった。
- 学級リーダーを決め、代表委員会に定期的に参加することで、児童会と各学級とのつながりが明確化され、全校児童で組織する児童会という意識を、児童のみならず教職員にも高めることができた。

<課題>

①「つながる」取組（「自律力」「学級力」の育成）

○授業のUD化の視点のうち、「共有化」のための活動として、ペア学習、グループ学習を取り入れようとするのだが、日頃あまり話をしていない友達とのコミュニケーションがうまく取れず、まだまだ指導や経験が必要であることが明らかになった。コミュニケーション能力の育成には、その根底に、友達とうち解けた気持ちで話し合えたり不安なく発表できたりする人間関係づくりが欠かせないことが改めて感じられた。



視覚化を意識した板書

②「学ぶ」取組（「学力」の育成）

- 現状は4段階の階層のうち、参加段階と理解段階の手立てに取り組んでいる状態であり、さらに、習得段階、活用段階へ向けて、試行錯誤を重ねて実践していく必要がある。
- 学習のねらいや活動を焦点化したり、教材にしかけを取り入れて計画したりするためには、事前の深い教材研究が不可欠である。また、指導者側のねらいを児童が取り組みたくなるめあてへと組みなおしていくことには、かなり大胆な発想の転換が必要であるため、研修と取組を続けて、慣れていくことも大切だと考える。
- 授業の進め方や視覚化のために有効な準備物などを蓄積するために、個人の成果を学校の成果として残り、積み上げていくことで、授業のUD化のための時間と労力を省き、取組を続けやすくすることもこれからの課題であると考えている。

③「広げる」取組（「自治力」の育成）

- 本年度構築した児童会組織をさらに児童に意識させ、学校を自分たちの手で変えていこうとする意欲を高めていきたい。
- 話し合い活動の方法を研究し、各学年に応じて一定のマニュアル化を図り、児童が自分たちで話し合い活動を設定し進めていける力を養いたい。



全校児童の選挙で、児童会長を選出